

日本海海戦を科学する

—— 東郷平八郎の決心 ——

倉谷 昌伺

はじめに

明治38(1905)年5月14日、極東へ回航中のロシア太平洋第2艦隊及び第3艦隊(通称:「バルチック艦隊」以下「バルチック艦隊」と記述)は最後の寄港地仏領インドシナのヴァンフォン湾を出港したが、日本はその後しばらくの間はその行動をつかむことができなかった。敵艦隊の一部でもウラジオストック(以下、「ウラジオ」と記述)に入港してしまえば、ウラジオ港残存の太平洋第1艦隊の巡洋艦隊の一部とともに再編成され、日本の海上交通線は常にロシアに脅かされる。そうなれば中国大陸への食糧・軍備補給路が寸断され、日本軍は壊滅的な被害を被ることとなる。鎮海湾で待機しながら刻々と入手される敵情により、大本営と連合艦隊司令部幕僚たちの敵の行動に関する見積りどのように変化していったのか。また、東郷平八郎連合艦隊司令長官はその兵力のほとんどを鎮海湾に待機させたが、それはどのような判断からであったのか。

先行研究としては、戦記的考察を中心にして記述した外山三郎の研究¹があるが、ロジェストヴェンスキー率いるバルチック艦隊側の記述にやや偏っており、東郷が待機位置の選定についてどのように考えていたのか明確な記述がない。また、野村實はその著書で、ほぼ全兵力を鎮海湾に待機させ敵艦隊の行動を監視し、機に応じて敵を完全撃破するとしているが²、なぜ鎮海湾を選んだのか明確な分析がなされていない。さらに田中宏巳の著書では、東郷長官は、当初からバルチック艦隊の対馬海峡の可能性が高いと考え、出撃に便利な鎮海湾に全勢力を配置したわけではなく、バルチック艦隊が3海峡の一つを通峡してウラジオストックに入る可能性と東シナ海のある位置に基地を設置して東シナ海と黄海で行動する可能性を想定し、両者の中間に当たる朝鮮海峡に全勢力を投入した³としているが、旅順陥落以降、旅順港が軍港としての用をなさなくなった後の待機位置に関する記述はない。

¹ 外山三郎『日露海戦史の研究』(下)教育センター、1985年、168頁。

² 野村實『日本海海戦の真実』講談社、1999年、78頁。

³ 田中宏巳『東郷平八郎のすべて』新人物往来社、1986年、174～175頁。

本小論では、旅順港が使用不能となった後の待機場所の選定について科学的な手法（ゲーム理論）により検証し、東郷長官の状況判断について考察することとする。

1 旅順口陥落後の連合艦隊の待機位置について

バルチック艦隊が宗谷海峡・津軽海峡・対馬海峡（当時は、「朝鮮海峡」と呼称）のいずれの海峡を通るかを予想し、連合艦隊をどのように配置するかは大本営及び連合艦隊にとって、極めて重要な問題であった。明治38(1905)年1月2日、東郷長官は、艦隊の全力を「鎮海湾」に配置し、機に応じて動くことにしていた。「鎮海湾」は現在の大韓民国の南岸に位置し、対馬海峡西水道に面した良港であるとともに、連合艦隊を収容するのに十分な外港である加徳水道を有し、北上すると思われる敵艦隊を捕らえて戦術的展開を行うのに都合がよく、地形的にも艦隊を秘匿するために適していた。海洋国家系地政学研究者で、かつ、海軍戦略の権威でもあるマハン（Alfred T.Mahan）⁴は、その著書「海軍戦略」の中で、海軍戦略上の決定的要素として「艦隊」と「根拠地」を挙げており、同著第2章の論点となる「中央位置」に関して、日本海海戦において東郷長官がその艦隊を旅順港とバルチック艦隊の中間位置に配備したことは好例であるとしている⁵。また、我にとっては旅順とウラジオの2港を基地とする敵が地理的に近い位置にあるということは、我の強点でもあり、この点から考えても当時日本の軍事占領下にあった朝鮮の「鎮海湾」は、対ロシア艦隊作戦のための好基地であったといえよう。さらに鎮海湾待機の連合艦隊は、佐世保という后方支援基地を近傍に有しており、これも我にとって強点であった。

2 津軽方面への移動（北進）時機の決定と待機位置の再考

明治38年1月1日、旅順が陥落し、その後、旅順港は軍港としてその役割を果たすことができなくなったが、東郷は相変わらず鎮海湾に居座り続けた。明治38年4月10日の東郷長官の伊東祐亨海軍軍令部長に対する敵情判断の答電には、「・・・本職ハ敵艦隊今後ノ出現地點如何ニ依リテハ急ニ島前、七尾若

⁴ 1840-1914、米国海軍の軍人・歴史家・戦略研究者、1892年から翌年まで第二代の海軍大学校長を務めた。

⁵ Alfred T.Mahan, *NAVAL STRATEGY*, Little Brown And Company, 1915, p.40.

クハ大湊ニ根據地ヲ移動スルヤモ計リ難シ・・・⁶との記述があり、待機場所として「鎮海湾」の他、島前（隠岐）、七尾、大湊を考えていた節が窺えるが、鎮海湾を選択し、ここで待機し続けた。下の表は、5月22日から26日までのバルチック艦隊に関する情報、大本営及び連合艦隊司令部の処置・判断をまとめたものである。

月日	記 事
5月22日	情 報：1245 バタン海峡において三井物産の雇い船がロシア艦の臨検を受け、その時のロシア海軍士官が「台湾東方を経て対馬海峡に向け航行する。」と明言 連艦司：推定速力による出現予想時期に至るもバルチック艦隊出現せず。対馬海峡は信用できない。混乱させる計略とも考えられる。北方へ移動すべき（「北進論」）との意見が浮上、バルチック艦隊の通過海峡を確認できず。 大本営：ほぼ対馬海峡通峡と判断
5月24日	連艦司：・封密命令書配布（北方移動準備開始） ・北進第一電発信 （相当の時期まで敵を発見できない場合は、北海方面に迂回したものと判断して、連合艦隊を津軽方面に移動させる。） 大本営：1415 北進第一電着信 連合艦隊は対馬海峡に留まるべきとの見解
5月25日	連艦司：午前中に軍議を開催、全体として、対馬海峡通峡はありえず、津軽海峡にいないと判断していたが、藤井大佐、島村少将の意見・説得により移動反対に落ち着く。 ・北進第二電発信 （26日の正午まで艦隊を見なければ北進を決断する。） 大本営：1340 移動は慎重に考慮するように（北進第二電と行違い。） 1537 北進第二電着信 連合艦隊の一部はすでに北進したと勘違い。
5月26日	情 報：0005 ロシア艦隊運送船等、25日夕刻に ^{ウースン} 呉淞入港 夕刻には、ロシア艦隊は東シナ海にある。 連艦司：早朝、ロシア艦隊の運送船等、25日夕刻に呉淞入港を知る。 大本営：早朝、ロシア艦隊の運送船等、25日夕刻に呉淞入港を知る。

（野村實『日本海海戦の真実』講談社現代新書の第4章をまとめ、整理したもの）

当時の日本海軍の通信能力の低さもあり、海戦直前の24日から25日にかけては、大本営と連合艦隊司令部の双方に混乱が生じ、十分な意思疎通がなされていない。北進（津軽海峡方面に移動）の決断に大きく左右したものは、5月24日に配布された封密命令書と5月25日に行われた軍議であった。封密命令書は、伝令では漏れる恐れがある場合に秘密保持を目的に配布するもので、艦

⁶ 海軍軍令部編「極秘 明治三十七八年海戦史」第二部巻一、防衛研究所図書館資料室所蔵、37頁。

からの信号や指定された時刻に開封し、中身の命令を実行に移すものであった⁷。この時の封密命令書は24日に配布され、その内容は「敵艦隊は北海方面に迂回したと推断する。」「連合艦隊は会敵の目的で今より北海方面に移動する。」等であり、「北進第一電」として発信した内容とほぼ同じであった。封密命令書は、開封されれば即実行される性格のものであったが、「出発時刻はさらに信号命令による。」とされていた。「北進第一電」は軍令部への報告のために発信されたと見られている。これには、「準備は実施しておけ、ただし移動については、これから入手できるであろう新情報により判断、別途令する。」と記されている。ここには東郷長官が、できる限り「鎮海湾」で待ち続けようとする意図を十分に窺うことができる。

軍議は、5月25日「三笠」艦上において開かれた。参集者は、第2艦隊司令長官上村彦之丞をはじめ、各司令官、第2艦隊参謀長藤井較一大佐等であり、その場は直ちに津軽方面移動との雰囲気であったが、藤井大佐のみが移動反対を説いていた。遅れて参加した第2艦隊司令官島村速雄少将の「艦隊の推進速度に見積誤差がある。長期航海による心理面、補給面等から考えてウラジオオまでの最短距離である対馬を通る。」との主張により、軍議の雰囲気は変化し、最終的には次の情報が入るまで「鎮海湾」で待機することを東郷長官に意見具申した。東郷長官は、封密命令書の発令を1日延期することとし、26日正午まで「鎮海湾」で待つこととした。

3 ゲーム理論等による連合艦隊の待機位置の検証

「帝国海軍第二期作戦方針」に記述されている、バルチック艦隊の考えられる行動として、

ウラジオストク

- 第一、決戦ヲ覚悟シテ浦塩 斯徳港ニ進航シ、爾後同地ヲ根拠トシテ作戦ス
- 第二、日本南部若クハ南清方面ノ一地点ニ占拠シ、之ヲ根拠トシテ作戦スルモノ
- 第三、南洋方面ニ留リ我ガ艦隊ト対峙シ、漸次到着スヘキ後続艦隊ヲ加へ、好機ヲ待チ第一若クハ第二ノ策ニ出テントスルモノ

の3つの記述がある⁸が、これを総括的に記述すると、作戦基地は、ウラジオ又は日の南方もしくは清の南方の一地点と言うことになる。

⁷ 野村實『日本海海戦の真実』講談社、1999年、99頁。

⁸ 海軍軍令部編「極秘 明治三十七八年海戦史」第二部巻一、防衛研究所図書館資料室所蔵、14頁。

前述のとおり、明治38(1905)年1月1日、旅順が陥落してしまい、これによりバルチック艦隊は、後方支援基地旅順港を失い、極東のロシア海軍の唯一の根拠地はウラジオ港のみとなった。このため、日本海軍が見積っていた敵の可能行動のうちの1つの「日本の南部もしくは、南清方面の一地を占拠しての作戦」が採れない状況に陥った。敵はウラジオ港を利用した作戦を採らざるを得なくなったわけであるから、直接ウラジオへ向け航行する公算が大となった。これにより連合艦隊はウラジオ港に入港するために通過するであろう海峡、すなわち「宗谷」⁹、「津軽」、「対馬」いずれの海峡にも対応できる日本海を中心付近に位置する日本の港湾、泊地を待機位置とすべきであることは容易に推察できる。この時、東郷長官は、艦隊をどこに再配備すべきであったであろうか。この点についてこの後、ゲーム理論により検証することとする。ゲーム理論は、戦略ゲームのある状況におかれた当事者の最適な行動問題を、厳密に取り扱い、それによってもたらされる均衡の状態がどのようになるのかを調べることができる数学の一つの分野である。ここでは、当事者である東郷長官は連合艦隊の利益を最大にするように行動するが、連合艦隊にもたらされる結果はその行動のみではなく、敵艦隊の行動により変化する。まず分析を進める上での前提を次のとおり定義する。

(1) 分析のための前提と利得行列

- ・ 待機位置を4地点(鎮海湾、隠岐島(島前)、七尾湾、陸奥湾(大湊))の4案とする。
- ・ バルチック艦隊の通過海峡の案を「対馬海峡」、「津軽海峡」及び「宗谷海峡」の3つとする。
- ・ バルチック艦隊は9ktで航行し、連合艦隊は各待機位置の入口付近で待機し、同艦隊発見情報を得たならば、その待機位置から12ktで出港し、会敵するごとく行動する。
- ・ 連合艦隊とバルチック艦隊との会敵時におけるウラジオ港までの残航程(nm単位)を表3-1及び図3-1のとおりとする¹⁰。

⁹ ロジェストヴェンスキー長官は宗谷海峡の通峡について、濃霧が発生しやすく艦隊航行には不向きであり、ウラジオまで行程が他の海峡よりも長く、その前に千島水道を通過する必要があるため事前に行動を察知され、西側で待ち伏せされる可能性が高いと見て、考慮していない。

¹⁰ この数値は、連合艦隊がバルチック艦隊を捕捉することを前提とし、捕捉できればウラジオ入港までの間、攻撃、撃滅するという目的に合致しており、作戦目標に対する案の善し悪しの尺度として評価できると考えられる。

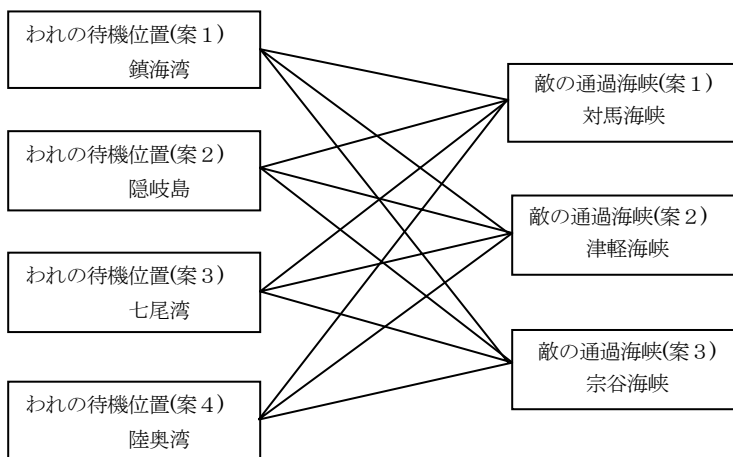


表3-1 ウラジオ港までの残航程の見積り(単位:nm)

		通過海峡		
		対馬	津軽	宗谷
待機位置	鎮海湾	600	130	160
	隠岐島	540	210	230
	七尾湾	300	320	290
	陸奥湾	190	470	410

この前提に従えば、待機位置4箇所と通過海峡3箇所との組み合わせは、上図のとおり12組となる。

また、表3-1の利得行列を考えると、行列は4×3、ゲームは2人零和行列ゲームとなる。行に「連合艦隊の待機位置」を、列に「敵の通過海峡」を使用すると、連合艦隊(我)は最大化プレイヤーであり、その数字(利得の保障レベル)が大きいほど我は攻撃機会(時間)が増加することになる。

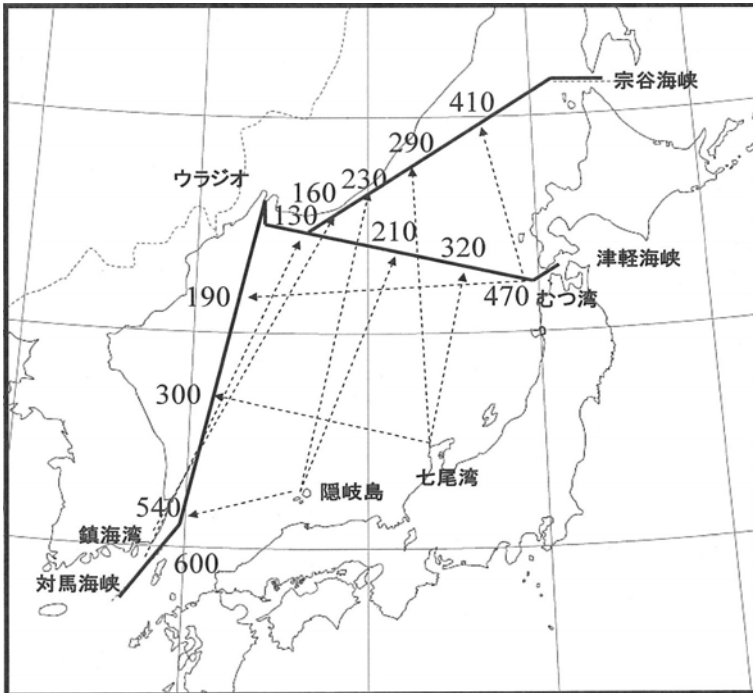


図3-1

一方、最小化プレーヤーはバルチック艦隊(彼)であり、その数字(損失保障レベル)は小さいほど被攻撃機会は少なくなり、ウラジオに入港可能な艦艇の隻数増加が期待できる。

この行列を基本として、以後、さまざまな条件を付与して比較し、分析してみることにする。

(2) 待機位置の対抗分析

ア 「鎮海湾」と「隠岐島」の対抗分析

ここではまず、「鎮海湾」と待機場所の候補地の一つであったと考えられる「隠岐島」と対抗させて分析してみる。

この2つの組み合わせの場合、最大極小値と最小極大値が一致することから戦略は純粋戦略となる。このようなケースは極めて稀であり、我は「隠岐島」待機、彼は「津軽海峡」を通峡する戦略が確定する。(残行程の平均(解)は、210nm)

表3-2

		通過海峡			極小値	210 (最大極小値)
		対馬	津軽	宗谷		
待機位置	鎮海湾	600	130	160	130	210 (最大極小値)
	隠岐島	540	210	230	210	
	極大値	600	210	230		
		210 (最小極大値)				

イ 史実に基づく分析

(7) 敵情入手前の判断（「鎮海湾」と「陸奥湾」の対抗分析）

第2章で述べたとおり、史実では、「鎮海湾待機」か「津軽方面へ移動」かとの大本営と連合艦隊司令部間での葛藤があり、これを「鎮海湾」と「陸奥湾」の2カ所の待機位置とすると2×3の利得行列（表3-3）となる。

表3-3（「鎮海湾」対「陸奥湾」）

		通過海峡			極小値	190 (最大極小値)
		対馬	津軽	宗谷		
待機位置	鎮海湾	600	130	160	130	190 (最大極小値)
	陸奥湾	190	470	410	190	
	極大値	600	470	410		
		410 (最小極大値)				

この場合は私の最大極小値は「190」、彼の最小極大値は、「410」となり、利得が異なるため、双方はある確率をもって複数の戦略をとる混合戦略となる。これは不等式を使用し、グラフにより解くことができ（図3-2参照）、結果は、私は「鎮海湾」を0.33の確率で、「陸奥湾」を0.67の確率で選ぶのが最適戦略となる。一方、バルチック艦隊についても解くと、対馬を0.38、宗谷を0.62で選択し、津軽(0.00)は選択しないのが最適となる（解は327.5nm）。わかりやすく言えば、もし、バルチック艦隊が100回の通峡機会あるとすれば、連合艦隊が、そのうちの33回を「鎮海湾」で、67回を「陸奥湾」で待機すれば、バルチック艦隊が、100回の通峡機会においていずれの海峡を選択し、通峡しても最適となることを表している。実際にはバルチック艦隊の通峡は1度のみと考えられるため、東郷長官は、「鎮海湾」か「陸奥湾」かのどちらかに賭けて選択しなければならぬ。（たとえ我が確率が高いほうを選択しても、彼がわざわざ確率の低い海峡を選択するとは限らない。）

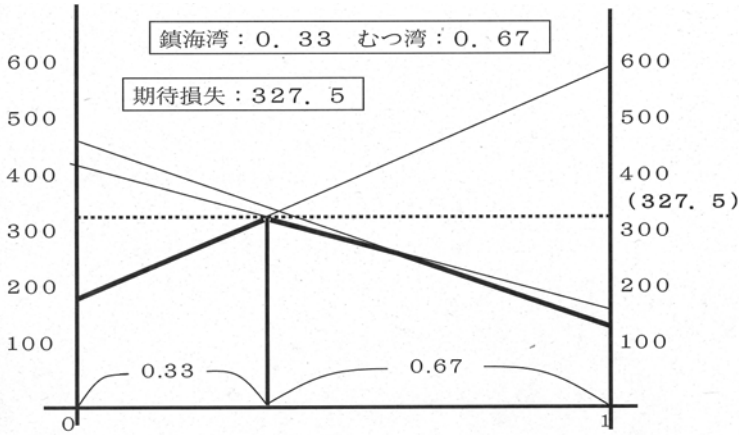


図3-2

(i) 敵情入手後の分析

鎮海湾待機中の26日0005、上海から「露国義勇艦隊5隻、運送船(給炭船)3隻、二十五日午後二時三十分上海呉淞ニ入港セリ」¹¹との電報が到着し、大本営は「敵艦隊は25日夕刻まではなお九州以南にある。」と判断した。(バルチック艦隊の航跡については図3-3参照)

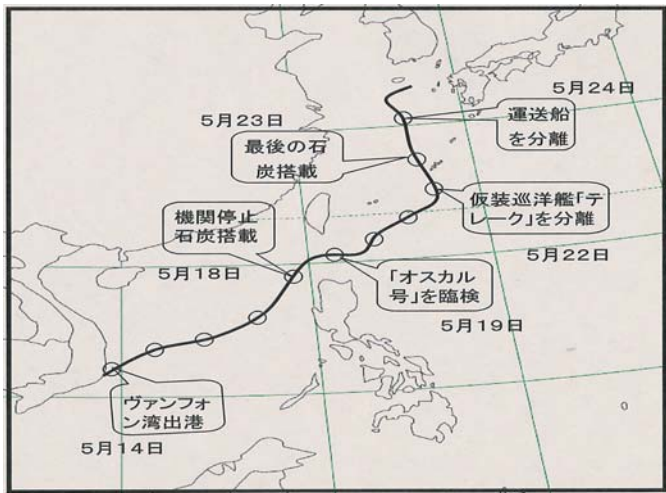


図3-3

¹¹ 海軍軍令部編「極秘 明治三十七八年海戦史」第二部卷一、防衛研究所図書館資料室所蔵、655頁。

東郷長官も同様に敵の一部が上海に現れたため、当日夕刻の出動を見合すこととし、引き続き鎮海湾において待機を続行し、警戒を厳とした。東郷長官は「日本列島を迂回する長距離コースを採るならば途中で給炭が必要となるため給炭船を手放すはずはない。」と考え、バルチック艦隊は「津軽」海峡を通峡する可能性はないと判断した。これは利得表でいう「対馬」のみが残ることになり、2つの待機場所のうち値の大きな「鎮海湾」(600nm)を選定するのが最適となる。

表3-4

	対馬	津軽	宗谷
鎮海湾	600	130	160
陸奥湾	190	470	410
極大値	<u>600</u>	470	410

(3) ある条件を付与した場合の指揮官の判断

ここでは最終的な決心を行う指揮官にある条件を付与して分析することとする。

ア 敵情が全くなく、消極的な判断をする場合

5月25日時点の状況を考えてみると、事実、連合艦隊はバルチック艦隊が仏領インドシナのヴェン・フォン湾を5月14日に出港し、北上しているという情報を15日に入手して以来、約1週間を経過していたが何の情報も得ていなかった。このケースは、バルチック艦隊の位置情報が日本側に全くない場合であり、この場合には、敵のみが私の採る待機位置を完全に知っていると考え、敵は私にとって最悪(私の利得を最小とする。)の通過海峡を採るというのも一つの考え方である。この考えは、ワルドの基準(マックスミン利得基準)と呼ばれ、消極的で非常に手堅い手である。この場合、私の待機位置として「七尾湾」を採れば、敵がいずれの海峡を通峡しても利得の保障レベルは「290」以上が保障される(この時、「290」は待機位置「七尾湾」の最低保障レベルという。)ゆえにバルチック艦隊の位置が全くわからない状況で、かつ、私の情報を知って合理的に行動する敵に対してこのような消極的な判断をした場合には最善の待機位置は「七尾湾」となる。

イ 数学的手法の結果を考慮して決心する場合

上記の利得行列は、4×3の行列であり、当時これを解くことは海軍内では不可能であったろうと思われるが、ここでは線形計画法(シンプレックス法)

表3-5

		通過海峡				
		対馬	津軽	宗谷	極小値	
待 機 位 置	鎮海湾	600	130	160	130	290 (最大極小値)
	隠岐島	540	210	230	210	
	七尾湾	300	320	290	290	
	陸奥湾	190	470	410	190	
	極大値	600	470	410	410	
		410 (最小極大値)				

により分析してみることにする。現代においてはコンピューターソフトを利用し、簡単に解くことができる。結果を下表に示すが、この分析によると、結果的には待機位置の「鎮海湾」と「七尾湾」を棄て、「隠岐島」及び「陸奥湾」をそれぞれ0.42、0.58の確率で選定するのが最適な戦略（表3-6参照）ということとなる（この時の利得は335nm）。これにより少なくとも「鎮海湾」待機はあり得ないことになる。ちなみに、ロジェストヴェンスキーにとっては、津軽を捨て、対馬か宗谷を選定するのが適当となる。（表3-7参照）

表3-6

待機位置	確率
鎮海湾	0.00
隠岐島	0.42
七尾湾	0.00
陸奥湾	0.58

表3-7

通過海峡	対馬	津軽	宗谷
確率	0.34	0.00	0.66

(4) 小 括

以上のケースをまとめてみる。

ア 「鎮海湾」と「隠岐島」

「鎮海湾」より東側にある「隠岐島」付近で待機するのが最適である。

イ 「鎮海湾」と「陸奥湾」

選択すべき確率では、「鎮海湾」より東方にある「陸奥湾」が高い。

ウ 敵情報がなく、消極的な判断をする場合

「七尾湾」待機が適当である。

エ 数学的手法による結果に従う場合

選択すべき待機位置としては「隠岐島」と「陸奥湾」が適当であるが、やや「陸奥湾」のほうが高い。どちらかを選択するのが適当である。これらのケースの分析結果から、総合的に考えて、5月24日以前の比較的早い時期から、連合艦隊は鎮海湾よりも東側の待機位置（津軽海峡方面）に近い海域に待機位置を移すのが適当であったということが言える¹²。

4 分析結果と東郷の決心

以上のように、ゲーム理論を使用し、いくつかの条件を付与することにより、その場合の我（東郷長官）の最適行動方針を決定することができた。ゲーム理論を利用すれば、最適の行動を採ることにより最大の利益を得ることができ、誤算や誤った判断による行動方針の選択による大きな損失を未然に防ぐことができる。

ゲーム理論による分析では、もし、東郷長官が5月22日以降、北方に移動し、待機位置である「隠岐島」、「七尾湾」、「陸奥湾」のいずれか一つを選択する方針であったならば、バルチック艦隊の津軽海峡に対しても対応できる日本海の中央地点付近の待機位置を選択した方が我に有利であるという結果を表している。また、史実に則った組合せである「鎮海湾」と「対馬」の利得レベルは「600」、「七尾湾」と「対馬」の値は「300」であり、後者が前者の半分になっていることから、もし、バルチック艦隊が津軽海峡を安全に通峡していれば交戦機会（時間）は半分以下となり、被攻撃をまぬがれてウラジオ港に入港できた艦艇も相当数あったであろうと推察できる。このように考えると、旅順口陥落後も鎮海湾に待機し続けた東郷長官の行動は、非常に危険な決心であったと思われる。ではこれほどのような判断からであったのか。バルチック艦隊のような大艦隊が、一度に日本周辺の海峡を通峡することは一回限りであり、東郷としてはこの機会を逃がすわけにはいかなかったのであろう。そこで原点にもどり、彼の使命は、何だったのかを推察してみることとする。

東郷長官に与えられた使命は明治38（1904）年4月12日に軍令部が策定し

¹² 第2艦隊司令部の先任参謀であった佐藤鉄太郎中佐は、当時、秋山真之中佐と並ぶ戦略家と言われ、「対馬・津軽両海峡のどちらに来ても敵の艦隊のウラジオ入港までに交戦できるようにするため、隠岐諸島の島前に移るのがよいと思います。」とリコメンディングしている。野村實『日本海海戦の真実』講談社、110頁。

た「帝国海軍第2期作戦方針」に示されている作戦方針の第2項「作戦ノ目的」と同10日に軍令部長伊東祐亨大将が東郷長官に対して出した訓令から導き出すことができると推察できる。これらを示すと次のようになる。

- ① 「東洋ノ海上権ヲ確實ニ保持スルハ戦争終局ノ目的ヲ達成スルニ至大ノ関係ヲ有ス、而ツテ海上権ヲ保持センガ為メニハ先ズ敵艦隊ノ主力ヲ撃破スルコト絶対ニ必要ナリ、故ニ我カ海軍作戦ノ目的ハ依然敵艦隊ノ殲滅ヲ以テ主眼トス」¹³
- ② 「敵増援艦隊ノ先頭ハ、既ニ新嘉坡沖ヲ航過セリ。貴官ハ、同艦隊ノ北上スルノヲ待チ、大海令第一号第一項ノ目的ヲ達成スルコトヲ努ムベシ」¹⁴

①の作戦目標は、「東洋ノ海上権ヲ確實ニ保持スル」であり、「敵艦隊ノ殲滅」が上級指揮官の与えられた目標、すなわち任務に相当すると考えられる。

また、②の「大海令第一号第一項ノ目的」とは開戦に際して発令された大海令(大本営海軍部命令)第1号第1項に示された「連合艦隊司令長官並ニ第三艦隊司令長官ハ、東洋ニ在ル露国艦隊ノ全滅ヲ計ルベシ」¹⁵であり、これは東郷長官に与えられた任務であると考えられる。

以上の内容をもとに東郷長官に与えられた「使命」を推察すると、

「東洋の海上権を確実に保持するため、

東洋のロシア艦隊の全滅を計る。」

【目的(帝国海軍第2期作戦方針) + 任務(大海令第1号第1項の目的)】と表現することができる。この時点ですでに旅順港のロシア太平洋第1艦隊は潰滅し、ウラジオ港の巡洋艦隊も4隻しか残っておらず、回航してくるバルチック艦隊を撃滅することでその任務を達成できることとなる。ここでの任務は、「敵艦隊の全滅を計る」となっており、艦隊の一部でもウラジオ港に入港させては、任務を達成したことにならず、極東における艦隊の再編成ができなくなるまで完全に艦艇を殲滅することが任務として与えられていたのであった。このことから、東郷は何としてでもウラジオ入港前に敵艦隊をたたき、再編成できないほどの壊滅的打撃を与える必要があった。このため、通峡が比較的容易

¹³ 海軍軍令部編「極秘 明治三十七八年海戦史」第二部卷一、防衛研究所図書館資料室所蔵、14頁。

¹⁴ 大海訓第21号海軍軍令部編「大海令・大海訓」防衛研究所図書館資料室所蔵。

¹⁵ 海軍軍令部編「明治三十七・三十八大海令、大海訓」海軍軍令部。

で、敵艦隊を一まとめに捕捉でき、逃げ場の少ない狭水域において広い海域に出る前に捕捉し、7段構えの戦法¹⁶によって完全に撃滅するための攻撃時間が十分に取れる海域の必要性から、対馬海峡に近い「鎮海湾」待機を選択したものと推察される。

ロジェストヴェンスキー長官の死後、本海戦の調査にあたったロシアの戦史家であるクラドー(Nicolas L. Klado)海軍大佐は、連合艦隊が宗谷と津軽を放棄し、対馬一つに絞った作戦方針を採ったことについて驚き、「対馬海峡で全艦隊と遭遇するが如きは全く予想外で不意に乗ぜられたようなものだ。」と評しており、連合艦隊の艦艇のほとんどが対馬海峡に集中しているとは想像してもいなかったようである。もし、ロジェストヴェンスキー長官が北方の2海峡のいずれかを日本艦隊の妨害もなく通過し、ウラジオに無事入港していれば日本の重要な海上交通路が重大な脅威にさらされることになり、日本軍のこれまでの勝利はおそらく意味をなさなくなっていたであろう。

また、東郷長官が予定どおり連合艦隊を北海方面に移動させるか、ロジェストヴェンスキー長官がもう一日給炭船の分離を遅らせていたらバルチック艦隊は連合艦隊のいない対馬海峡を通過していたであろう。会敵できた場合でも戦闘は広い日本海における海戦となり、敵の大部分を捕捉するのは困難となり、無事にウラジオに入港できた艦艇も多かったものと推察できる。まさに連合艦隊にとっては、移動直前の敵情入手のタイミング、バルチック艦隊の通過海峡の選択は、すべて東郷長官に味方する結果となり、非常に幸運であったと言える。

おわりに

本小論では、旅順口陥落後の連合艦隊の待機位置、北方への移動決心時期、その移動場所の選定について論述、ゲーム理論を使用し、連合艦隊の最適待機位置について検証することにより、東郷長官の意思決定の適否について考察した。会敵後の残行程を評価尺度としたため、できるだけこれを増やしたい連合艦隊側と少なくしたいバルチック艦隊の互いに相手の行動を窺いながらのとりべき行動の探り合いとなった。結果的に日本海海戦は、どのような条件の基で

¹⁶ ロシア艦艇の一隻をもウラジオに入港させない周到な迎撃作戦計画であり、七段（第一段（夜間襲撃）、第二段（主力決戦）、第三・四段（夜間襲撃）、第五・六段（追撃戦）、第七段（機雷戦））に区分されていた。

分析しようとも、敵が明確に対馬海峡を通峡するという確証が持てる以前においては、「鎮海湾」は捨てるべきであった。日本海海戦は辛抱強く「鎮海湾」で待機し続けた東郷と、約3分の1の確率ではあるが「対馬海峡」通峡という比較的合理的な選択枝を取ったロジェストヴェンスキーの決心が絡んだ結果生まれたものであった。このように考えると対馬通峡を選択し、結果的に祖国から酷評を受けたロジェストヴェンスキーには同情を禁じえない。そのロジェストヴェンスキーについて若干触れてみたい。旅順の陥落、祖国ロシアの「血の日曜日」事件などロシア革命の先駆となる事件が生起する中、彼は最後の航海に臨んで

- 敵艦隊との遭遇を求めるべきか
- ウラジオ入港のためどの航路を選定すべきか
- 祖国ロシアに引き返すべきか
- 第三国の港において武装解除すべきか

などの問題について誰にも相談せず、他の意見をも省みず一人で悩んだという。祖国では、彼は「日本に最も有利な条件を与え、対馬海峡に比較し、他の海峡の方が遥かに良好なのにあえて対馬を選択したことは極めて遺憾である。」と酷評されている。しかしながら、50隻余りの大艦隊を率いての1万7千nmの大航海、北海での英国漁船砲撃事件の生起、自殺者及び逃亡者発生、士気の低下、不十分な後方支援等の状況下で正常な状況判断は極めて困難であったろう。このような環境の中での統率、敵に挑んだ勇氣は賞賛されるべきものである。

本小論は日本の史料による日本側指揮官の分析であったが、今後は、ロシア側の資料からロジェストヴェンスキーの分析してみたい。